

## 2008 年度 卒業論文 (要約) 」

題目 山あいの農地でパンを焼き荒神様に奉納する実践報告

カ  
ト  
「

学籍番号	30451701
氏 名	仁城 亮彦

## 山あいの農地でパンを焼き荒神様に奉納する実践報告

ぼくの卒業研究は、ブログ「825 日記 - なぜパンを焼くか -」(<http://825.nagomifarm.jp/>)で、研究活動における実践と思考のプロセスを、文と写真あるいは動画によって公開しながら進められた。このブログには、卒業論文の全文も掲載している。

卒論について、芸術学コースのシラバスには、そのまとめ方として「芸術史研究」と「調査報告」の2つの学習スタイルが示されており、この卒業研究には後者を適用することにした。調査対象については、「今日的な地域の芸術活動や自他の芸術実践」とあるので、自分でこの卒業研究のために計画する活動をその対象とする方向で進めることにした。

しかし、自分の計画したことが「芸術活動」や「芸術実践」と呼ぶものかどうかは自明なことではないし、そもそも誰もが疑わずに「芸術」だと認めるものが、果たして「今日的」だとも思えない。結局のところ「芸術とは何か」と問い、自分なりの解答を示すという、芸術学科における学びの本質に立ち返って、活動計画や論文のスタイルを決め、活動プロセスにおいて「芸術を発見する」ことに、実践と思考のベクトルを向けなければならない、ということになる。ぼくは、自分自身を導く芸術教育はそのような仕組みになっている、と理解した。

芸術教育から求められることと合わせて、自分が求めること、すなわちこの学びの動機についても自覚しなければならない。ぼくには、生活から離れて図書館や美術館などに入り浸って孤独に過ごすことを、卒業研究の活動実態とするわけにはいかない個人的な事情が2つある。1つは、すでに家族という他者と一体となった生活を送り、近い将来、パン屋や農業を営む可能性をはらんだ山あいの暮らしがあり、もはや「食べる」と「知る」ことの関わりと無縁の活動に時間を費やすことはできないということ。もう1つは、一度、芸術大学で芸術やデザインを学び、卒業して、その後10数年にわたり「芸術」に対して感じてきた閉鎖性や閉塞感とけりをつけたいという、入学当初からの思いだ。この「通信教育」という仕組みを利用して、パン屋、農業、芸術学がそれぞれ交通する仕組みを作り、学習活動と隣り合わせにある自分の生活を変革したい。そういう生活のための切実な学びの動機と、シラバスが示す学習の枠組みが重なる点において、ぼくの卒業研究は成立している、と考えていだろう。

というわけで、この卒業研究のために次のように活動を計画した。

地域にある身の回りの自然素材(石、土、木、竹、水など)を用いて、代々受け継がれている山の中の農地(825)でパン窯を作る。そのパン窯で焼くパンに使う材料の小麦を自家栽培し、パン用の酵母菌を825で採取・培養する。燃料の薪も825の雑木を用いる。実際にパンを焼いて、最後には、この地域で行われる7年に一度の神楽(荒神神楽)の際に、荒神様という近所の神様へ奉納する。

「825」とは、我が家の農地を含む山一帯の呼称で、地域では「ハチンゴ」と発音する。ここが活動の拠点となった。この計画は「1.自分の身体を使い可能な限りモノやサービスを買わない」「2.ごみを発生させない」という、広義のエコロジーを踏まえ、資本主義の時代や社会を反省的に意識した方針に沿って立てられ実行された。こうして、活動は日常とは異なるフレームによって認識されるが、活動それ自体は生活に連続し、必要な資源を生活から取り入れ、また得られたものを生活にフィードバックする。

卒論本文は、こうした活動と生活を行き来する実践と思考を、4部構成でまとめた。まず「序論 活動計画」で活動の概要を示した。「本論(陰) パン屋と農業と芸術学(あるいは芸術教育)」では、自然、科学、メディア、食べること、信じることなどについて思考を巡らしつつ活動の意味づけを行った。「本論(陽) 活動の経緯」として、農作業、パン窯作り、パンの奉納など項目に分けて、これらの活動を生活との対話によるものとして考察した。「結論」では、「芸術とは開かれた営みである」という主張とその動機や理由を、「折り合い」というキーワードを巡って考察し、今後の方向性を述べた。

ぼくにとって、この卒業研究を含めた通信教育による芸術教育は、生活と折り合いをつけつつ緊張感を伴いながら融合し、その全体を方向づけるものだった。しかも十分に自由で、将来に向かってほどよい活力に満たされていた。この卒業論文がそれらを象徴しつつ、ご指導いただいた先生方への感謝の気持ちと、日本全国の同窓生へのエールとして読まれることを望んでいる。内容の未熟な点については、志の持続と今後の活動の展開によってそれらを補っていくことを約束したい。

(字数 1932)